

DIGって？

Disaster（災害）

Imagination（想像）

Game（ゲーム）

それぞれの頭文字をとって「DIG」といいます。

DIGは「掘る」という意味を持つ英語の動詞でもあり、「探求する」「理解する」という意味も持っています。

DIGは「災害を理解する」「まちを探求する」「防災意識を掘り起こす」という意味が込められた防災力を高めるための方法です。

出典：消防庁ホームページ
(<http://www.fdma.go.jp/>)

DIGのやり方

参加者が自分たちの住むまちの地図を囲み、みんなでワイワイ楽しく議論をします。

地図の上に病院、避難所、防災倉庫など地域の防災のために役立つ場所、鉄道や幹線道路などを油性ペンで書き込んだり、付箋で印を付けていったりします。

地震や風水害、火災発生、それに伴い生き埋め現場発生、道路の寸断など刻々と変化していく災害状況を想定します。

参加者は、この情報に応じて、避難方法や避難路などを考えて地図に書き込みます。そして、書き込まれた地図を見ながら、起こりうる被害やその対応策について話し合います。



ゲームを通じて、いつの間にか、自分が住むまちで起こる災害を具体的にイメージし、ゲーム感覚で災害が起きたときの対応を考えることができます。

DIGのねらい

災害を知る

書き込みという形で行われる地図との対話によって、地域の防災上の長所や短所が自然に理解されるようになるはずです。

住民自身が自分たちの手で防災に関する地図を作り、地域のウィークポイントを知ることや被災状況をイメージすることは、地域の防災力を高める第1歩です。

まちを知る

「まちの構造はどうなっているのか」「危険な場所や注意しなければならない施設はどこか」地図に書き込んでいくにつれて、自然と地域を見直し、自分のまちがどのようなまちなのか理解できるようになってきます。

そして、自分のまちの災害に対する弱さや強さがより身近なものとして感じられてくるのです。

人を知る

「いざという時に頼りになる人はどこにいるのか？」「近所に手助けが必要な人はいないか」といった情報を地図に書き込んでいきます。

また、みんなで作業を進めるうちに参加者の間で連帯感が生まれ、信頼関係が育まれていきます。

参加者全員が真剣に討議を重ねることによって参加者の間に連帯感や信頼関係がうまれます。また、準備段階での共同作業は、地域のネットワークづくりに最適です。自主防災の意識が自然に芽生えることに大きな期待が持てます。

さらに、参加者が自分で気づき、自分で解決する力が付くこと、防災活動に必要なしきりのセンスが身に付くこと、地図の使い方になれることなどさまざまな効果があり、地域の防災力が無理なく自然に向上します。

STEP

3

DIGのようす

この道は細いから
車が通りづらいね



災害が起きたらどういう経路
で逃げればいいのか...





ここには昔線路があったんだよ

もしも火災が起きたら、
地震が起きたら...



学校や公園が避難所
になっているんだ



どんな困りごとが起きる？
助けが必要な人がいたらどうする？

たくさんの意見がでました